

歴文29年9月研修会  
「国生み神話と弥生古代遺跡の淡路島探訪」

1、実施日：平成29年9月12日（火） 雨天実施

2、集合場所・時間：近鉄大和西大寺駅南口 8：00

3、行程スケジュール

大和西大寺駅（8：00発）⇒淡路島ハイウェイオアシス（10：00）

⇒絵島（おのころ島）（10：10～10：40）

⇒五斗長垣内遺跡（11：00～11：50）学芸員解説

⇒伊弉諾神社（12：00～12：20）

⇒高田屋嘉兵衛公園で昼食（12：30～13：00）

⇒松帆活性化センター（13：15～14：05）学芸員解説

⇒淳仁天皇陵（14：30～15：00）⇒帰途へ

⇒淡路島ハイウェイオアシス（15：50～16：00）

⇒大和西大寺着駅（18：00）

4、資料「国生み神話と弥生古代遺跡の淡路島」

①「国生み神話と淡路島」

②「五斗長垣内遺跡」

③「伊弉諾神宮」

④「銅鐸について」

⑤「淳仁天皇陵」

5、参加者名簿

奈良・人と自然の会  
歴史文化クラブ

担当世話人：中井弘・坂東久平・青木幸子・鈴木末一

事務局・連絡先：古川祐司

(Tel 090-4298-2344)



ハイウェイオアシス

五斗長垣内遺跡

伊弉諾神社

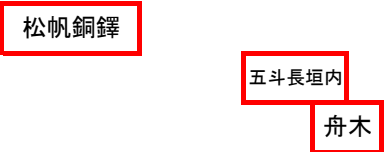
高田屋嘉兵衛公園

松帆銅鑄発見場所

淳仁天皇陵

沼島

淡路島の遺跡(時代背景)



BC 3 2 1 1 2 3 AD

前2.5万年 前1万年 前300年 200年中頃 592年 700年 710年 794年

旧石器	縄文時代	弥生時代	古墳時代	飛鳥時代	藤原	奈良時代	平安
25,000年	10,000年	600年	崇神 景行 仲哀 仁徳 反正 安康 清寧 仁賢 繼体 宣化 敏達 崇峻	推古 舒明 皇極 孝徳 斉明 天智 弘文 天武	持統 文武	元明 元正 聖武 孝謙 淳仁 称徳 光仁	桓武 平城
		神武	垂仁 成務 心神 履中 允恭 雄略 顕宗 武烈 安閑 欽明 用明				

\* 弥生時代の始まりは、BC10とする説もある。

氷河期:大陸と陸続き	稲作、金属器(青銅、鉄)	ヤマト王権の誕生	538 仏教伝来	700 藤原遷都	710 平城遷都	平安遷都
石器から土器へ	(大陸文化＝技術＋道具)	3C中頃:箸墓古墳(280m)	593 聖徳太子 摂政		724 聖武天皇即位	
橿原遺跡	唐子・鍵遺跡	4C中頃:メスリ山古墳(230m)	646 大化の改新		752 大仏開眼	
(縄文晩期:西日本最大)		5C倭の5王	672 壬申の乱			
		6C終末期古墳:八角墳など				

(外国歴史との対照)

239 景初3年  
239 卑弥呼 魏に遣使

中国	(春秋・戦国時代) 秦	漢	魏・蜀・呉	晋	南北朝	隋	唐	907年まで
	秦:前778～前206	漢:前206～220	三国:220～280	晋:265～420		581～618	唐:618～907	
秦の変遷:春秋時代:前770～前476(周の列侯)、戦国時代:前475～221(7雄の一つ)、前221:秦が中国を統一(始皇帝)								
190～238 公孫・燕      439～589 南北朝								
朝鮮	古朝鮮	三韓(新羅・百済・高句麗)	百済、高句麗					
		漢の4郡(樂浪、帶方)	新羅					
		高句麗:BC1～668	百済:346～660	新羅:356～935				

## 国生み神話と淡路島・・・・・・・・by 古川

### 1. 神々の誕生（古事記による）

①天地の始まりと同時に、高天原に 5 柱の独り神が出現したが、いつのまにか姿を消す。

・・・・・・・・「別天津神（ことあまつかみ）」と称する。

- ・天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）
- ・高御産巢日神（たかみむすびのかみ）
- ・神産巢日神（かみむすびのかみ）
- ・宇摩志阿斯訶備比古遲神（うましあしかびひこちのかみ）
- ・天之常立神（あめのとこたちのかみ）

②次に、國之常立の神（くにのとこたちのかみ）以下 7 代の神が次々に現れ、最後に伊耶那岐の神（いざなぎ）・伊耶那美（いざなみ）の神（いざなみのかみ）が生まれた。

・・・・・・・・神世七代（かみよななよ）という

### 2. 国生みと大八洲の誕生（古事記による）

別天津神たちは、伊耶那岐・伊耶那美の神に、「漂える国を治め固めよ」と命じ「天の沼矛」を授ける。二人の神は「天の浮橋」に立って、「天の沼矛」で海原をかきまわし、引き上げたときに、滴り落ちる潮が凝り固まって一つの島となった。これが「おのころ島」である。

二神は、その島に降りて天の御柱と「八尋殿」（広大な殿舎）を建て、夫婦の契りを結んで国生みをされた。はじめに産んだのが淡路島、その後つぎつぎと大八洲（おおやしま）の国々を産んだ。島の名は生んだ順に次のとおりである。

①淡路島：淡道之穂之狭別島（あはぢのほのさわけのしま）

②四国：伊予之二名島（いよのふたなのしま）

胴体が 1 つで、顔が 4 つある。顔のそれぞれの名は以下の通り。

愛比売（えひめ）：伊予国、

飯依比古（いひよりひこ）：讃岐国、7 代の

大宜都比売（おほげつひめ）：阿波国

建依別（たけよりわけ）：土佐国

③隠岐島：隠伎之三子島（おきのみつごのしま）、別名は天之忍許呂別（あめのおしころわけ）

④九州：筑紫島（つくしのしま）

胴体が 1 つで、顔が 4 つある。顔のそれぞれの名は以下の通り。

白日別（しらひわけ）：筑紫国、豊日別（とよひわけ）：豊国、

建日向日豊久土比泥別（たけひむかひとよじひねわけ）：肥国

建日別（たけひわけ）：熊曾国

⑤老岐島：伊伎島（いきのしま）：別名は天比登都柱（あめひとつばしら）

⑥対馬：津島（つしま）：別名は天之狭手依比売（あめのさでよりひめ）



⑦佐渡の島 : 佐度島 (さどのしま) :

⑧大倭豊秋津島 (おほやまととよあきつしま) : 本州、別名は天御虚空豊秋津根別 (あまつみそらとよあきつねわけ)

二神は続けて 6 島を産む

①吉備児島 (きびのこじま) : 児島半島、別名は建日方別 (たけひかたわけ)

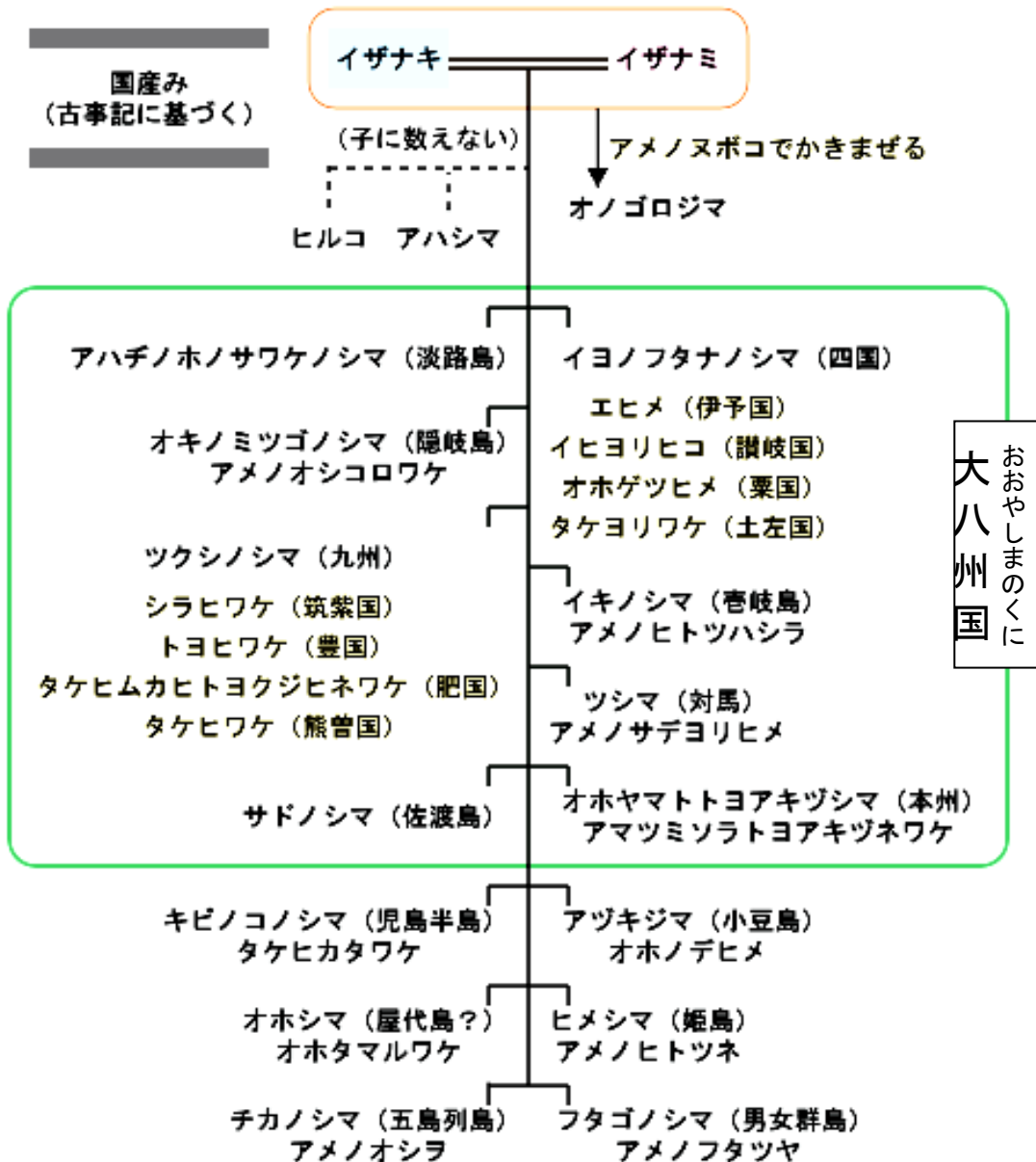
②小豆島 (あづきじま) : 小豆島、別名は大野手比売 (おほのでひめ)

③大島 (おほしま) : 周防大島、別名は大多麻流別 (おほたまるわけ)

④女島 (ひめじま) : (大分県) 姫島、別名は天一根 (あめひとつね)、上古の黒曜石の産地

⑤知訶島 (ちかのしま) : 五島列島、別名は天之忍男 (あめのおしを)

⑥両児島 (ふたごのしま) : 五島列島の南、男女群島、別名は天両屋 (あめふたや)



(注)『日本書紀』には・・・

本文では、「別天神（ことあまつかみ）」は存在せず、伊弉諾（イザナギ）・伊弉冉（イザナミ）が自発的に国生みを進める（巻一第四段）。生んだ島も古事記と一部異なっている。即ち、淡路島は「胞（えな）」とされて大八洲には入らず、「豊秋津洲」、「伊予二名洲」「筑紫洲」「億岐洲」「佐渡洲」「越洲」「大洲」「吉備子洲」を以て大八洲とする。（壱岐、対馬が抜ける）

### 3.国産み神話のルーツ

歴史学者上田正昭氏は、著書「日本の神話」なかで、国産み神話のベースには、淡路の海人族（あまぞく）の伝える「島生み神話」があったとされる。

『瀬戸内海の島生み、とりわけ「おのころ島」とその周辺を舞台とする国生み神話の原始の姿は、淡路地方を中心とした海人たちの間に生まれた島生みをめぐる信仰があったと考える。これが応神天皇を祖とする河内王朝の王権の世界に包摂されたとき、八島の国生みの神話として凝縮を見たのではないか』と説く。

さらに、

『淡路の国は、古くから大和朝廷が屯倉（みやけ）設けて、直接の支配下におき、さらに御饌都国（みけつくに）と呼んで食料貢献の特別な地としたことに関係するであろう。このようなことから、淡路の海人たちが朝廷に出仕するようになり、淡路の神話が宮廷に伝えられて、島造りの物語りも宮廷や中央豪族の間に知られていたことであろう。古事記や日本書紀の編纂の時期（奈良時代）に壮大な「国生み神話」として語られたのであろう』とされる。

また、歴史学者岡田精司氏は、著書『古代王権の祭祀と神話』のなかで、

天皇即位の儀礼として、大八島の御魂を天皇に付着させる「八十島まつり」の神事のあることから、この即位儀礼は、おのころ島や淡路島を目前にする河内王朝で初めて具象化したものであるとして、国生み神話の歴史的背景を説明される。

### 4.オノコロ島とは ・ ・ ・ ・ ・ b y 青木

『古事記』『日本書紀』に登場する島。神々がつくり出した最初の島となっている。イザナギノミコト（男神）とイザナミノミコト（女神）が、国生みの際に、「天の浮き橋（あまのうきはし：天と地を結ぶ宙へ浮く橋。神はこの橋を渡って地へ降りるとされる）」に立ち、天の沼矛（ぬぼこ）をまだ何も出来ていない海原に下ろし、「こをろこをろ」とかき回し矛を持ち上げると、滴り落ちた潮が積もり重なって島となった。これがオノゴロ島である。

オノゴロ島の候補地は様々な見解があるものの、淡路島周辺の小島だろうと考えられている。

平安前期に書かれた『新撰亀相記』と鎌倉後期成立の『釈日本紀』では、オノゴロ島に沼島を当てており、近世以降のほとんどはこの沼島説が定説となっていた。

江戸中期の国学者、本居宣長は『古事記伝』に、オノゴロ島は淡路島北端にある絵島と見立てている。

## ①沼島

沼島は空から見ると勾玉のような神秘的な形をした離島で 1 億年前の「地球のしわ」とされる「鞘型褶曲（さやがたしゅうきょく）」と言う、非常に珍しい岩石が発見された島である

沼島の海岸線には奇岩や岩礁が多く見られ、東南海岸には、矛先のような形をした高さ約 30m の屹立する巨岩「上立神岩（かみたてがみいわ）」がそびえ立ち、国生みの舞台を思わせる象徴的な存在となっている。この上立神岩は、神話に登場する「天の御柱」とも言われ、イザナギノミコトとイザナミノミコトの 2 神が降り立たと伝わっている。



沼島の上立神岩（かみたてがみいわ）

## ②絵島

絵島は淡路島の岩屋港にある小島。地質学的に貴重な約 2000 万年前の砂岩層が露出し、岩肌の縞模様が美しく、『山家集』の歌や『平家物語』などにも詠まれ、古来より月見の名所として知られる。

近くの岩屋城跡の丘下洞窟には、イザナギノミコトとイザナミノミコト、そして 2 神の最初の子である蛭子命（ヒルコノミコト）を祀る「岩樟（いわくす）神社」がある。日本神話で蛭子命は負具の子であったため、後に葦舟にのせて流されてしまう神であるが、伝承によるとこの岩屋から蛭児命は流され、えびす宮で有名な西宮神社に辿りつき神体になったと言われている。



## 五斗長垣内遺跡（ごっさかいといせき）と舟木遺跡 －邪馬台国時代の鉄器生産基地か－ by 中井

### 1. 五斗長垣内遺跡（1世紀後半～2世紀）

平成21年1月、淡路市黒谷の五斗長垣内遺跡で、大規模な鉄器工房群（12棟）を含む23棟の竪穴建物群が発見され、弥生時代後期（2世紀後半）としては、国内最大規模となる鉄器生産集落であることが判明した。

淡路市教育委員会によれば、弥生時代後期、1世紀後半から2世紀にわたる鉄器生産に特化した鍛冶遺構であり、100年以上生産が続いていたとする。淡路島北部の海岸から3kmに位置し、標高200mの丘陵上に営まれていた。その内、発掘されたのは500m x 100mの広さの一部区域である。平成24年に国史跡に指定された。

市教委の伊藤宏幸部長は、

「ついに近畿地方で鉄器生産の有力な証拠が見つかった。瀬戸内海東端の淡路島で発見された「五斗長垣内遺跡」は、弥生時代の鍛冶遺構の発見例が少ない近畿地方はもちろん、日本列島において、鉄器生産や鍛冶技術の伝播の在り方を知る上でも、極めて重要な遺跡」と説明する。（註1）

#### （1）遺構と出土品について

##### ①1世紀後半の鍛冶作業遺構

発掘調査では、竪穴建物跡23棟が見つかり、そのうち12棟に鍛冶炉跡が確認された。また、いろいろな鉄器や鉄器を作るための石製鍛冶工具が出土し、ここで鍛冶作業を行っていたことが確認された。この遺跡は一般集落ではなく、鉄器生産に特化した工房跡で、「鍛冶屋のムラ」であったと考えられている。

##### ②鉄器づくりの鍛冶工場跡

直径10m近い大型竪穴建物の中で、炉で熱した鉄素材を「台石」に載せ、「叩き石」（ハンマー）で打ち伸ばし、裁断・成形作業を経て、「砥石」で仕上げ、鉄鏃（てつぞく・矢じり）などの鉄器を作っていた。

建物内には複数の炉があり、鍛冶に必要な送風作業も行われていたようだ。炉は、掘り込みは行わず、床面をそのまま炉底とした構造で、赤く焼けた中に黄色から白色に硬く焼けた地面が残っている。

##### ③鉄器は鉄鏃や小型工具類

鉄器は130点以上が出土、主に鉄鏃（矢じり）や小型工具類などを生産していたようだ。建物内で見つかった長さ18cmの大きな板状鉄斧は、鉄器の素材であり、朝鮮半島製とみられている。また、叩き石（石英、斑禰岩など）、台石（花崗岩など）、砥石（砂岩など）などの石器や、弥生土器も多数発掘された。

#### （2）五斗長垣内遺跡についての考察



### ①時代背景と疑問

「魏志倭人伝」によると、2世紀の後半、倭国は約30国に分かれて小国が争う「倭国大乱」が起きていた、これが卑弥呼の登場によって治まったとある。

この時期は、まさに当鍛冶工房の最盛期と重なる。出土した鉄器に鉄鏃（矢じり）が多いことは、何を意味するのか、また、倭国動乱から卑弥呼の時代にかけての淡路島（淡路国？）はどのような存在だったのだろうか。

### ②近畿有力豪族連合の鉄器基地説

鉄器工房跡が多く見ついている九州や山陰地方に比べて、従来は畿内にほとんど確認されていなかった。この遺跡発見は様々な議論をもたらしている。学界では、播磨から河内、大和にかけての有力者が連合し、鉄を中心とした物資の流通を統括し、その拠点として瀬戸内海の要衝である淡路島に築いたのではないかともいわれている。

### ③鉄素材の入手ルート

当時の倭国では、鉄素材の「鉄鋌」や「鉄斧」は朝鮮半島からの舶来である。潮流が速く岩礁だらけの危険な瀬戸内海ルートがこの時期に開拓されていたのか疑問が残る（註4）。考えられるのは、筑紫・出雲・但馬・丹後などの日本海沿岸から、琵琶湖や淀川水系、或いは加古川水系を利用したルートが開拓されており、このルートが使われたのであろうか。

### ④天日槍（アメノヒボコ）伝承

「播磨国風土記」に天日槍（アメノヒボコ）伝承がある。新羅の王子が瀬戸内海ルートで播磨にきて、淡路島を占拠した。さらに但馬の円山川流域も支配し、出石に本拠を置いたという。天日槍は製鉄技術を持ってきた渡来系集団という説もあり、淡路島の五斗長垣内遺跡との関連が気になるところである。

## 2、舟木遺跡（2世紀半ば～3世紀）

兵庫県淡路市教委は、平成29年1月、弥生時代後期の舟木遺跡（同市舟木）から大型の鉄器工房跡を確認したと発表した。（毎日新聞2017年1月25日）

平成28年に発見された「舟木遺跡」は、「五斗長垣内遺跡」から北東約6kmに所在し、海岸から約2km、標高150mの丘陵上に営まれていた。

遺跡中心部の状況を把握するため狭い範囲（130㎡）を調査した結果、鉄製品57点と工房を含む竪穴建物跡4棟が見つかった。同遺跡全体の鉄器工房の規模が、南西約6キロにある国内最大級の鉄器生産集落で国史跡の五斗長垣内（ごっさかいと）遺跡をしのぐ可能性（約40ヘクタール：800m x 500m）があるとしている。

### ①鍛冶遺構とともに土器、青銅鏡が出土

発掘された大型の竪穴建築物跡4棟で鉄器製作用とみられる多数の石製工具や鉄器が出土した。うち3棟は直径10m以上の円形建物跡、うち1棟では中央部に赤く焼け

た炉跡 4 基あり、炉辺から鉄片が発見された。鍛冶用とされる砥石・叩き石など石製工具も発見されている。そのほかに青銅製の中国鏡の破片や器台、製塩土器、飯蛸壺などが出土している。

## ②生活用鉄器専門の鍛冶集落か

「舟木遺跡」は、生活用と思われる鉄器が中心である。「五斗長垣内遺跡」よりも長く生産を続けていたとみられている。

## ③淡路島北部に大規模な工房群の存在も想定

市教委は、建物跡は鉄器生産工房と、鉄工具を使用した何らかの生産工房で、大規模な工房群の存在も想定できるとみている。淡路島北部には弥生時代後期の遺跡群が集中しており、五斗長垣内遺跡の消滅後も鉄器生産を続ける集落が存在していたことが裏付けられたとしている。

## (補足－1) 弥生時代の淡路島

弥生時代の淡路島をたどれば、南あわじ市の松帆銅鐸は弥生時代前期～中期（紀元前3～前2世紀）、五斗長垣内遺跡は同後期（1世紀半ば～2世紀後半）、舟木遺跡は後期後半から終末期（2世紀半ば～3世紀初め）と時代が移っている。

青銅器の銅鐸文化から鉄器文化への移行に伴い、勢力の中心が淡路島南部から北部へ、平野部から山間部へ移ったことが、今回の発見で改めて鮮明になった。

（産経新聞 2017 年 1 月 26 日記事より）

## (補足－2) 彦根市にも 3 世紀前半の大規模な鉄器工房遺構「稲部遺跡」

2016 年 10 月の滋賀県彦根市教委の発表によると、卑弥呼の時代（3 世紀前半）の鉄器工房群の遺構が発見された。同時代では他にない規模（20 ヘクタール）で、大規模な建物の跡も確認された。当時、鉄製品の原料は大陸からの調達に頼っており、同時代の邪馬台国について記した中国の史書「魏志倭人伝」で、大陸と交易があったとされる「三十国」のうちの一つともみられるという。

福永伸哉・大阪大教授（日本考古学）は「稲部遺跡は東西日本の結節点にあり、近江勢力の大きさを物語ると共に日本の国の成り立ちを考えるうえで貴重」と話す。

（毎日新聞 2016 年 10 月 17 日記事より）

## (註) 参考文献等

1. 「郷土史の談話室」神戸・兵庫の郷土史 WEB 研究館
2. 「五斗長垣内遺跡と舟木遺跡」 神戸っ子 WEB 伊藤宏幸
3. 「古代日本海文明交流圏」 小林道憲著
4. 「古代史の謎は海路で解ける」 長野正孝著
5. 関連新聞記事（朝日・毎日・産経）

## 伊弉諾神宮 (神宮の HP より抜粋)

『古事記』・『日本書紀』の「国生み神話」に登場する伊弉諾尊(イザナギ)と伊弉冉尊(イザナミ)の二柱をお祀りする神社です。『古事記』・『日本書紀』に記載がある中では全国で最も古い神社で、淡路国一宮として古代から全国の掌敬を集めています。延喜式名神大社、三代実録神格一品、昭和二十九年に「神宮号」を宣下されましたので、伊弉諾神宮と改称し、兵庫県下唯一の「神宮」に昇格しました。

記紀には国生みに始まるすべての神功を果たされたイザナギ尊が、御子神である天照大御神に国家統治の大業を委譲され、淡路島の多賀の地に、「幽宮 (かくりのみや)」を構えて余生を過ごされたと記されています。その御住居跡に御神陵が営まれ、そこに創始されたのが、伊弉諾神宮の起源です。所在地の旧一宮町 (現 淡路市) の地名は、当社に由来する。地元では「一宮さん」(いっくさん)とも呼ばれます。また日之少宮、津名明神、多賀明神、淡路島神、一宮皇大神とも別称されています。

### 「陽の道しるべ」

伊弉諾神宮を中心にして、神宮の真東には飛鳥藤原京、さらに伊勢皇大神宮(内宮)が位置しており、春分秋分には同緯度にある伊勢から太陽が昇り、対馬の海神(わたつみ)神社に沈みます。神宮の境内には、太陽の運行図として、このことを紹介する「陽の道しるべ」というモニュメントが建っています



幽宮 (かくりのみや)

◎イザナギの終焉の地としては『古事記』と『日本書紀』の記載は違っています。

『古事記』・・・『古事記』の真福寺本の「伊耶那岐大神は淡海之多賀に坐す也。」による。(現在の彦根市“多賀神社”)。ただし、多賀大社の祭神は南北朝時代の頃までは伊弉諾尊ではなかったことが判明している。同じ『古事記』でも真福寺本以外の多くの写本が「故其伊耶那岐大神は淡路之多賀に坐也。」になっており、その他の諸々の理由から、学界でも「淡海」でなく「淡路」を支持する説が有力である(武田祐吉、直木孝二郎等)。

『日本書紀』・・・「幽宮を淡路の洲に構り (つくり)、寂然に長く隠りましき」(淡路島の津名郡一宮町大字多賀の“伊弉諾神宮”)と記す。

## 銅鐸について

by 坂東久平

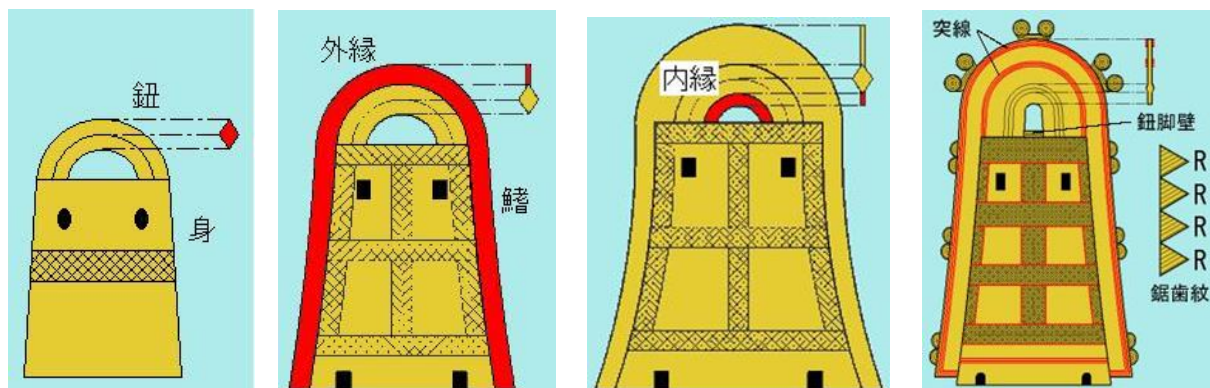
稲作、鉄器、青銅器が紀元前 3 世紀に日本に伝来し、銅鐸の製作が始まったが、使用目的は明確ではなく、祭祀に使用したとの説が有力である。弥生時代の後期に突然製作や使用が止められ、埋納された。

松帆銅鐸は、弥生前期、中期の古い型のものであり、謎が多い。

### (考古学者・佐原真氏 (註参照) の型式及び編年分類)

銅鐸はこれまでに、記録だけのものや破片だけのものを含めて 600 個近くが出土しています。この膨大な数の銅鐸を、佐原真氏が詳細な検討をされて、現在主として鈕の形態の変化により編年され、全部で 4 形式に分類された。

年代		弥生前期	弥生中期	弥生中期	弥生後期
		BC 3	BC 1	AC 0	AC 2
型式		(最古式、I 式)	(古式、II 式)	(中式、III 式)	(新式、IV 式)
		菱環鈕式	外縁付鈕式	扁平鈕式	突線鈕式
特徴		鈕の断面が菱形	鈕の外側に外縁が付く	鈕の内側には内縁が付く	緒や鈕・鐸身に突線が付く
サイズ		30～50cm	30～50cm	30～50cm	最大130cm



I りょうかんちゅうしき  
菱環鈕式

II がいえんつきちゅうしき  
外縁付鈕式

III へんぺいちゅうしき  
扁平鈕式

IV とつせんちゅうしき  
突線鈕式

聞く銅鐸



見る銅鐸

(註) 佐原真氏

京都大学大学院博士課程修了(考古学専攻)、弥生時代を中心とした考古学研究に携わり、研究範囲は幅広く、日本人の起源から衣食住にまでわたる。奈良国立文化財研究所勤務などを経て、国立歴史民俗博物館館長等を歴任した。

## (何故埋められたのか?)

(出典：出雲歴史博物館、他)

銅鐸は埋納された状態で発見されることが多く、その理由については諸説があり、未だ定説はありません。

(埋納される場所の特徴)

1. 集落から離れた、見晴らしの良くない丘陵斜面 (荒神谷)
2. 集落から遠く離れた、見晴らしの良い山頂や山腹
3. 集落近くの、低湿地

(埋納諸説)

1. 祭祀説： 農事などの祈りを大地に捧げる祭祀
2. 保管説： 普段は埋納し、祭祀の時に使用する
3. 隠匿説： 大切な宝を奪われないように、地中に隠した
4. 廃棄説： 祭祀の方式が変わり、不要になった

銅鐸を使用していた文化が、突然に否定され、マツリゴトが大きく変化したと考える説もあり、弥生時代後期に何が起こったのか、大変興味深い。

弥生時代に青銅器が大陸より伝来し、銅鐸と同時に銅剣も作られたが、武器としては鉄剣に変わり、銅剣は祭祀用となったと考えられる。

分布としては、銅鐸が近畿地方を中心とし、銅剣は九州、中国、四国に多くみられる。

## (松帆銅鐸について)

(新聞記事などを纏めた)

2015年5月20日に、南あわじ市・松帆で、弥生時代前期末～中期初めの銅鐸7個が発見された。この内6個は3組の入れ子状態になっており、5号銅鐸は破損状態であったが、島根県出雲市の荒神谷遺跡の6号銅鐸と同じ鑄型(同範=どうはん)で作られた兄弟銅鐸であることが分かった。(その後の調査で、松帆銅鐸が先に出来たと推定されている)

また、松帆3号銅鐸と、島根県・加茂岩倉遺跡の27号銅鐸とが同範であることも判明した。

松帆銅鐸の正確な出土地は分からないが、江戸時代に松帆地区で8個の銅鐸が出土しており、現存する「慶野中の御堂銅鐸」は松帆2、4号と同範であることも判明した。

銅鐸の製作地は不明であるが、「畿内を中心とした広域の流通ルートがあり、淡路島が海上交通路や何らかの要衝だった」とする説もある。

銅鐸の複数埋納や入れ子、銅剣も見つかるなど、淡路と出雲では青銅器の扱いに共通点が見られる。青銅器が多く出土し、古代から重要な場所とされてきた出雲に比べ、淡路は注目されてこなかったが、日本最古の歴史書「古事記」によると、淡路は国生み、出雲は国譲りの地として伝わる神話の舞台であり、ロマンを掻き立てられる。



## 淳仁天皇陵（ウィキペディアより）

### 第 47 代淳仁天皇

第 47 代淳仁天皇は、在位 6 年：天平宝字 2 年（758 年）～天平宝字 8 年（764 年）、文書では廢帝、または淡路廢帝（あわじはいたい）と呼ばれる。（現在の諡号は明治時代に付けられたもの）

天武天皇の皇子・舎人親王の七男で、踐祚前は「大炊王」と称す。母は当麻老の娘・当麻山背。聖武天皇の遺言によって新田部親王の子の道祖王が立太子したが、天平勝宝 9 年 3 月 29 日（757 年）に孝謙天皇によって道祖王は廢され、4 日後の同年 4 月、光明皇后を後ろ盾にもつ藤原仲麻呂の強い推挙により大炊王が立太子した。大炊王は仲麻呂の進言に従って、仲麻呂の長男で故人の真從の未亡人である栗田諸姉を妻に迎え、また仲麻呂の私邸に住むなど、仲麻呂と深く結びついていた。

### 踐祚

天平宝字 2 年（758 年）に孝謙天皇から讓位を受け踐祚し、孝謙天皇は、孝謙上皇となった。しかし踐祚後も政治の実権はほとんど仲麻呂が握り、専横が目立つようになる。

天平宝字 4 年（760 年）、仲麻呂を皇室外では初の太政大臣に任じた。同年、光明皇太后が薨去する。仲麻呂は平城宮の改築を実施し、翌天平宝字 5 年（761 年）天皇と上皇は小治田宮や保良宮に行幸して保良宮を「北宮」とした。ところが、保良宮滞在中に病みがちとなった孝謙上皇は看病していた弓削道鏡を寵愛するようになり、仲麻呂の進言により天皇がこれを諫めたところ上皇は烈火のごとく激怒し、天皇は上皇と対立するようになっていく。天平宝字 6 年 6 月 3 日（762 年）、孝謙上皇は、「今の帝は常の祀りと小事を行え、国家の大事と賞罰は朕が行う」と宣告し再び天皇大権を掌握しようとして、2 人は対立した。

### 廢帝

天平宝字 8 年（764 年）9 月、上皇との対立を契機に藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱が発生、天皇はこれに加担しなかったものの、仲麻呂の乱が失敗に終り天皇は最大の後見人を失った。乱の翌月、上皇の軍によって居住していた中宮院を包囲され、そこで上皇より「仲麻呂と関係が深かったこと」を理由に廢位を宣告され、5 日後の天平宝字 8 年 10 月（764 年）、親王の待遇をもって淡路国に流される。

淳仁天皇は廢位され、上皇は重祚して称徳天皇となった。だが、淡路の先帝のもとに通う官人らも多く、また都でも先帝の復歸（重祚）をはかる勢力が残っていた。危機感をもった称徳天皇は、翌天平神護元年（765 年）2 月に現地の国守である佐伯助らに警戒の強化を命じた。この年の 10 月、逃亡を図るが捕まり、翌日に院中で亡くなった。公式には病死と伝えるが、葬礼が行われた記録もない。称徳天皇の意向により天皇の一人と認められず、「廢帝」または「淡路廢帝」と呼ばれた。

## 淳仁天皇陵

陵は、兵庫県南あわじ市賀集にある淡路陵（あわじのみささぎ）に治定されている。記録では、淡路国三原郡（現在の兵庫県南あわじ市の天王森丘とされる）に造営されたという。

宝亀 3 年（772 年）光仁天皇は僧侶 60 人を派遣し、齋を設けて、その魂を鎮めた。宝亀 9 年 3 月 23 日（778 年 4 月 24 日）に山陵扱いとされた。



## 歴文9月研修会 参加者名簿

(敬称:略 アイウエオ順)

	氏名	参加料	備考
No.1	青木 幸子	4500円	世話人
No.2	青木 芳一	4500円	
No.3	阿部 和生	4500円	
No.4	池田 富子	4500円	
No.5	池田 信明	4500円	
No.6	小田 進八郎	4500円	
No.7	川勝 孝雄	4500円	
No.8	川岸 美子	4500円	
No.9	岸谷 和代	4500円	
No.10	小山 喜与男	4500円	
No.11	下村 晴文	4500円	
No.12	鈴木 末一	4500円	世話人
No.13	田積 彰男	4500円	
No.14	寺田 孝	4500円	
No.15	富井 忠雄	4500円	
No.16	永井 幸次	4500円	
No.17	中井 弘	4500円	世話人
No.18	中川 徹	4500円	
No.19	羽尻 嵩	4500円	
No.20	坂東 久平	4500円	世話人
No.21	坂東 由紀子	4500円	
No.22	古川 祐司	4500円	事務局・世話人
No.23	森 英雄	4500円	
No.24	森田 展正	5500円	新入(入会金1000円)
No.25	山本 妙子	4500円	
No.26	弓場 厚次	4500円	
No.27	弓場 京子	4500円	
No.28	吉村 さつき	4500円	